

「圧縮された近代化」と 「圧縮された災害復興」 — 中国・四川大地震に学ぶ災害復興 —

矢守克也 (京都大学)
渥美公秀 (大阪大学)
鈴木勇 (大阪大学)
近藤誠司 (NHK大阪放送局)

圧縮された災害マネジメントサイクル



4つの光景

今からお示する4つの光景
(写真) はすべて、
2008年10月中旬のある日、
四川省の被災地に見られたものです

4種類の光景...その1



・「新家园成都市災後重建規劃成果展」
・【復旧・復興】バラ色の復興未来予想図

その1は...バラ色の復興未来像

- 「新家园成都市災後重建規劃成果展」
- 成都市内の「天府博覧中心」にて
- 2008年10月～12月
- 被災諸都市(都江堰市など)の復興計画の展示(イラスト、ジオラマ、CGなど)
- 「都江堰市復興グランドデザインプロジェクト」の成果の一部(慶応大、東大など参画)
- 都江堰市と「対口都市援助」の相手である上海市の上海同済大学チームが諸プランを統合
- バラ色の復興未来予想図、住宅展示場、1970年大阪万博、関東大震災「帝都復興計画」(後藤新平)

4種類の光景...その2



・「汶川震憾:5.12-6.12日記」
・【被害抑止・軽減】あの時の回顧と教育的メッセージ

その2は・・・「あの時」の回顧

- 「汶川震憾：5.12-6.12日記」、成都郊外の「建川博物館集落」
- 2008年6月12日！オープン
- 人防の数倍の規模。おびたしいモノ、紙、写真＋生物（奇跡のブタ朱堅強）
- 灰色の世界、「そのとき」、「実物」の迫力、「毎日」の迫力
- 「美談・哀話」と「民族・組織・指導者」による「抗抗震救災・众志成城」の日々を回顧
- 未来の災害に備える教育的メッセージの体現

4種類の光景...その3



- 都江堰市内(5ヶ月後)
- 【応急対応】あの時のまま

その3は・・・「あの時」のまま

- 都江堰市内
- 5.12当時のまま、少なくとも前回訪問(5月末)時のまま
- 崩れたビル、立ち入り禁止のショッピングセンター、がれき
- 「修繕」「修復」「修旧」中の文化財
- 「その時」、「この場所」のまま

4種類の光景...その4



- シーファン：高齢者福祉施設
- 【応急対応→復旧】1ヶ月後開所、先進的

その4は・・・先端的な復旧

- 都江堰市近郊の高齢者向け仮設住宅、阪神大震災よりも先進的。
- 開所は、地震から1ヶ月後！
- 「30年は大丈夫」という半恒久的のプレハブ住宅15棟(概数)、各所に椅子が置かれ高齢者数名が談話、ゲーム。ただし、表情が硬く呆然としている方も。子どもをすべて亡くし、おじいさんと孫というペアも。
- 受け入れ可能人数は130人程度、スタッフは15人。入居者は高齢者。最高93歳。平均69歳。
- 各居室は2人部屋か1人部屋。トイレ、シャワー有り。
- 食堂、主任室、会計室、宿直室、医務室、リクレーション室、マッサージ室、ボラ控え室もあり。

「圧縮された近代化」

- 近年の中国社会一般の特徴を反映
- 園田(2008)の「圧縮された近代化」：「中国の近代化や経済発展があまりに早く、圧縮されているため、以前であれば一世代かけて起こるような現象が、ほぼ同時に起こるようになった
- 「圧縮された災害マネジメントサイクル」、「圧縮された災害復興」
- 時間軸での圧縮→空間での拡散・并存→「(地域)格差」、「温度差」

対口支援

- 対口支援と「格差」
- 19の省と直轄市が、被災地の県や市と1対1の関係を結んで支援
- 復興計画の策定、および、計画に基づく学校、病院、道路、橋梁などの公共施設やインフラストラクチャーの設計・建設・管理
- 各県・市の財政収入の1%相当額を投入、期間は3年

対口支援と格差

- 四川大震災以前から存在(内陸部の経済支援など)
- 「全国が地震被災地の復旧再建支援に取り組むもので、一種の『ノルマ』として内容も具体化。省と直轄市のトップは、外国訪問を見合わせるように指示」
- 鄧小平が唱えた「先富論」(改革・開放路線)の流れ
- 「可能な者から先に裕福になれ。そして落伍した者を助けよ」
- そこには、当然「格差」が生じる
- しかし、正確に記せば、「対口支援」という災害復興制度は、「格差」を前提にした、むしろ、「格差」を利用した制度

対口支援の陰

- 支援する側の競争(中央政府に対するデモンストレーション合戦)、地方首長の人事評価にも運動
- より大きな施設、より先端的なインフラが、「ご覧いただくための」モデルケースとして志向される
- 先述の先端的な高齢者福祉施設も、北京市の「対口支援」により建設
- 他方で、施設面でも運営面でもきびしい状況にあると考えられる同種の施設も同施設の周辺に多数あり
- 「圧縮された復興」=「圧縮された近代化」の縮小コピー、ないし、時間早送りの再生

対口支援の光

- 「対口支援」によって迅速・大量に供給される多くの公共施設、インフラの恩恵
- 「圧縮された近代化」の最中にある中国社会によくフィット
- 「対口支援」の推進(「先富論」)にとって破壊的なのは、現時点における「格差」ではなく(格差は、むしろ、「対口支援」の前提である)、現実的将来において「格差」が平準化するだろうとする期待が消失すること

思考実験:昭和30年代の大震災

- 思考実験:「もし1964年(昭和39年)=オリンピックイヤーに、阪神・淡路大震災が起きていたら…」
 - たとえば、新幹線の「前倒し」、「高規格」(耐震化、複々線化、高速化、24時間貨物化etc)も実現
- 「高度経済成長」:
 - 日本GDP: 40兆円(60年)→110兆円(70年)
 - 中国GDP: 140兆円(98年)→360兆円(07年)
 - 「所得倍増計画」(池田首相)と「四倍増計画」(第16回(2002年)党大会の目標)
- 四川大地震前後の中国は、人びとが現実的将来における「格差」平準化への期待を十分もちうる社会
- 2つの「格差社会」: ①中が下化する格差社会(「下流社会」)と、②下が中化する格差社会(「高度経済成長」)

<1対9>と<1対99>

- 「対口支援」を、そもそも可能にしている前提条件
- 被災地域と被災地以外の他の国内地域との<比>が、<1対9>ではなく、<1対99>であること
- <1対99>の災害としての四川大地震
 - 避難者数・被災者数と中国の総人口: 1500万・4000万人対15億人
 - 被災地の面積と中国の総面積: 10万平方キロ対960万平方キロ
 - 被害総額と中国全体のGDP: 10兆円対450兆円
- この圧倒的な体力差(格差)が「対口支援」の基盤

首都直下／東海・東南海・南海は〈1対9〉

- 〈1対99〉に対応するのは、阪神・淡路大震災
- 首都直下型地震では・・・〈1対9〉かそれ以下
 - 避難者数・被災者数と日本の総人口：
700万・1000万人以上対1.2億人
 - 被害総額と日本全体のGDP：
110兆円対500兆円
- 首都圏を被援助側、他地域を援助側とする「対口支援」は、構想しえない

日本的な対口支援？

- 都市部と村落部(中山間地)の特性差を活かした、民間、NPOベースの交換支援
- たとえば、中山間地や地方都市で起こった災害に駆けつける大量のボランティア
- 都市部で起こった災害に、村落部から炊き出し用の新鮮な食材
- NPO主導の日本版対口支援。被災地間連携
 - NVNADと塩谷や刈羽
 - レスキューストックヤードと田麦山
 - 震災疎開パッケージ(早稲田商店会など)
- 「あのおきのお返しに」。これには、直接的な交換関係ではなく、AがBに、BがCにという形も含む

まとめ:何のための(比較)調査？

- 復興プロセスに関する国際比較調査
- 単に、「××国では、こんなことをしていました」、あるいは、「日本の(すぐれた・進んだ)復興・防災ノウハウを××国に提供してきました」ではなく、以下の2点が重要
- 異なる社会・経済・文化的条件下で進みつつある災害復興を糧にした思考実験
- 現在の日本社会において自明視されている復興像を相対化し、新たな復興方式を模索・創造するための骨太の思考と具体的なプランニング

ありがとうございました



防災人間科学
矢守克也

拙著「防災人間科学」(東京大学出版会)
お買い求め、ご一読いただければ幸いです